自ら問い、自ら導く学生たち

ボランティアを行う満生さん。 この日は15時から通所者全員でおやつを食べた後、七夕の短冊に願い事を書いたり、飾りつけの準備などを行った。

「口腔保健衛生学の知識を学び、患者さんの視点に立った指導をしたい」

満生彩乃
（みついき・あやの）さん
歯学部
口腔保健学科4年

●満生さんは、子どもの頃から生物に関心を持っており、早くから理系の進路を意識していた。人とかかわる分野として歯科衛生士の道を選んだという。「高校生の時に歯列矯正をしてくれた歯科医師と歯科衛生士の方がとても優しく接してくれたのが印象的でした。それがきっかけで自分も歯科に進もうと決めました」と語る。

歯学部口腔保健学科口腔保健衛生学専攻4年の満生彩乃さんは、3年次の夏から、障害者介護を行う福祉施設の地球郷（東京都豊島区）でボランティア活動を行っている。

毎週土曜日に、午前9時から夕方の5時まで、障害者に様々な活動の支援を行う。午前中はスポーツ施設の室内温水プールで水泳、午後からは食事、入浴のほか、文字の読み書き、散歩などプログラムに応じて支援する。施設には、知的障害、脳麻痺、自閉症などの様々な症状の人が通っている。

「人と接することが好きなので、活動の支援をしながら過ごす時間はとても有意義に感じています」

大学で学んだことを生かすため、施設では口腔ケアを行うこともある。障害者は歯磨きが困難なこともあり、虫歯、歯周病などを発症していることが少なくない。誤嚥などの危険もあるので口腔環境の改善は必須となる。

「実際に口腔ケアをして、その難しさを痛感しました。障害のある方は口腔内の感覚が敏感なために、歯磨きなどが困難なケースもあり、十分な口腔ケアができないのです。将来的には、歯科衛生士として、少しずつでも、口腔内の健康を改善できるようになりたいです」

口腔保健衛生学専攻では、3年次後期から臨床実習が始まる。満生さんの学生生活は忙しくなった半面、ボランティア活動も含めて一層充実した日々を送っているようだ。

4年次の臨床実習では、歯学部附属病院の外来診療室で実際に患者に接しながら、口腔ケアや歯磨き指導、補綴物のチェックなどを行う。高齢者が多く、入れ歯や補綴物のケアを正しく行えていないケースが多いという。

「診療では患者さんに対して、歯磨きの仕方など丁寧な指導を心掛けています」

満生さんは、卒業研究のテーマに「発達障害児者の自傷行動と歯科的介入の実態」を選んだ。障害者には自分の手を噛むなどの自傷行為が多く見られるため、対策としてマウスピースや抜歯をする。そのような治療の有効性、代替治療法の可能性などを施設でのアンケートなどを通じて研究している。

「卒業後は、口腔保健衛生学の知識をきちんと身に付け、患者さんの視点に立って指導できる歯科衛生士を目指したいと考えています」

障害者歯科にも関心を抱いているため、社会福祉士資格を取得するための準備も始めている。ここからまた一人、あたたかく優しい歯科衛生士が巣立とうとしている。